Art Direction & Design by Shuhei Tsuji Illustration by Bengo Tsuji

薔薇の王国

DER ROSENKÖNIG

出演・マグダレーナ・モンテツマ
モステファ・ジャジャム
アントニオ・オーランド

監督・ヴェルナー・シュレーター

脚本・ヴェルナー・シュレーター
マグダレーナ・モンテツマ

撮影・エルフィ・ミケシュ

配給・ユーロスペース

男たちは、美しい。

愛と苦痛と死の儀式があなたの前頭葉を赤く染める。

一九八六年 西ドイツ・ポルトガル合作 カラー 一時間四十六分 一九八六年ドイツ撮影賞・エルフィ・ミケシュ

薔薇の王国
DER ROSENKÖNIG

1986年 西ドイツ・ポルトガル合作 カラー 1時間46分 35ミリ ヴィスタサイズ
1986年ドイツ撮影賞：エルフィ・ミケシュ
日本語字幕翻訳＝堀越謙三 配給＝ユーロスペース

euro space

脚本＝ヴェルナー・シュレーター／マグダレーナ・モンテツマ 監督＝ヴェルナー・シュレーター 撮影＝エルフィ・ミケシュ
製作協力＝マルガレーテ・フォン・トロッタ／ダニエル・シュミット／ヴィム・ヴェンダースほか
出演＝マグダレーナ・モンテツマ（アンナ）／モステファ・ジャジャム（アルベルト）／アントニオ・オーランド（フェルナンド）

〈聖なる庭〉の愛と死

黒田邦雄

ヴェルナー・シュレーターの『薔薇の王国』を見て、人がどんな反応を起こすかを考えることは、悪趣味な遊戯のように心をわくわくさせる。比類なき美しい映画と思うか、俗悪きわまりない汚らしい映画と思うか、自分勝手な世界に酔っているだけのマスターベーション映画と思うか、したたかに通俗で恥知らずのエロ映画と思うか、とにかく賛美にしろ拒絶にしろ、シュレーターの映画は人に曖昧な反応を許さない、実に厳しく強いものを持っていることは確かである。そして例えあなたがこの映画の賛美者であったとしても、その興奮や感動を万人に伝えようなどとは、決して思わないほうがいいだろう。それが徒労に終わるであろうことは、目に見えているから。

シュレーターの映画の持つ密やかな悦楽は、人と分かち合うものではない。自分自身の目や耳や皮膚が感じたシュレーターの官能世界は、自分だけのものであり、他人には通用しないことを知るべきだ。口角泡をとばし言葉を積み重ねようと、シュレーターの映画の魅力はさらさらと砂のようにこぼれ落ち、その行為のむなしさを思い知らされる。つまりシュレーターの映画は、言葉の伝達を拒否し、外への広がりを拒絶した、きわめて私的な人工庭園であり、密室空間なのである。シュレーターはこの広い世界の何事も一片として信じていず、そこに存在する総てのものを追い出して、自分の信じるものだけを集めた極私的ユートピアを創造しようとする。それは中世の宗教絵画によく描かれたく神に守られし楽園〉に匹敵する純潔空間であり、すべての堕落からまぬがれた聖なる庭である。当然、汚れきった言葉など通用すべくもなく、不適当な侵入者は即刻排除されるべき運命にある。

などと書くと、シュレーターの映画がいかにも排他的で難解な、観念過多の映画のように思われてしまいそうだが、実はその逆なのだ。『薔薇の王国』は、まさに薔薇という漢字のごとく、レオナルド・ダ・ヴィンチ的迷宮の人工庭園で繰り広げられる、華麗な愛と死のオペラ的ドラマだが、その語り口、映像は、恥ずかしいほど通俗的であり、初々しいばかりにロマンティックで、痛々しいほど露出症的である。ヴェルディのオペラとE.A.ポオの詩をバックにして、スクリーンいっぱいに映し出される真紅の薔薇は、食卓のスープを血の色に染め、薔薇園の息子がひそかに匿っている若者の血管を薔薇の色と薫りで満たす。薔薇園の美しい女庭師は、息子に尋ねる。「おまえが匿っているあの若者はだれ？」「薔薇の王様だよ、母さん」。息子は若者を素っ裸にして清め、血管に薔薇を接木する。「僕は何を愛するにしても、ひとりだけで愛してきたんだ」。

この息子の行為に、くエロティシズムは、本質的に人工的な世界に到達するために愛を口実として利用する、もしくは愛の上に接木される、病的なヴァリエーションの全体をふくむものである〉という、ロオ・デュカ*の見解を思い出さずにはいられない。それからすれば、この映画に描かれるエロティックな行為の総ては、愛にはぐれた者の孤独な儀式ということになろう。病的であるかどうかは問題があるが、愛ではなくエロティシズムなのだという主張こそ、この映画を解く重要な鍵であることは確かである。

愛が人工的であるように、ここでは死もまた人工的に描かれていく。「人は死に近づくために芸術を作るのか」というせりふは、この映画の気分を実によく表しているが、実際、映画もまたそのとおり、華麗なるカタストロフへと突き進んでいく。薔薇の王国はつまり死の王国であり、愛の園と見えた薔薇園は、愛へではなく、愛の死へと誘っていくところだったのである。だから、肉体を重ね合うふたりの青年が、愛よりも死の中に恍惚を見つけるのは当然で、死は総ての愛を越えるという認識が、この映画を何とも静謐で官能的なものにしている。ちなみにこの映画は、シュレーター作品の常連女優で、ここでも女庭師を演じているマグダレーナ・モンテツマの、死を予期して（彼女はガンの末期症状にあった）作られたものである。　＊渋澤龍彦著「神聖受胎」より引用

見どころ

薔薇栽培者アンナ（マグダレーナ・モンテツマ）の息子アルベルト（モステファ・ジャジャム）は、無垢な若者フェルナンド（アントニオ・オーランド）に魅せられる。納屋で忍び会う二人の恋は燃えあがり、フェルナンドの体を切り裂いたアルベルトはその血管に薔薇を接木する。

オペラとE.A.ポオの詩にのせ、鮮烈な映像で狂おしいばかりの男の恋心を綴った、壮絶な愛と死の物語。

ヴェルナー・シュレーター監督は、ホモセクシュアルを公言する西ドイツの異色耽美派。主演のマグダレーナ・モンテツマはシュレーター作品の常連でドイツ語圏ヨーロッパでカリスマ的な人気を誇る怪女優。モンテツマがガンに冒されているのを知ったシュレーターが、トロッタ女史やダニエル・シュミット、ヴィム・ヴェンダースらから資金協力を受け、急遽ポルトガルで撮影された。モンテツマは撮影終了半月後に他界した。

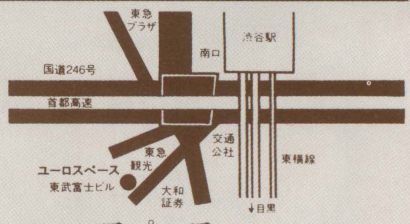
9月中旬より独占公開！

特別鑑賞券1200円（当日・一般1500円／学生1300円のところ）絶賛発売中

当劇場窓口および都内各プレイガイド、チケットぴあ、チケット・セゾンにてお求めください。

●上映時間［先着入場・入替制］

土日祝	11:20	1:30	3:40	5:50
月→金	12:20	2:30	4:40	6:50



ユーロスペース tel.461-0211
渋谷駅東急プラザ口下車2分 東急観光うしろ